

はじめに

発達に偏りのある子どもたちに対する支援の工夫や実践が、豊かに発信される時代になってきています。これは、とてもありがたいことです。

というのも、教師がこれまでの経験や勘で、うまくいかない場面に当たっても、それは子どもの問題や自身の指導力のせいではなく、まだその子に合った支援方法にめぐりあえないだけなのだと思いますからです。

でも、どんなにたくさんの方が発信されていても、どれがその子に合った支援方法なのかは、力のある教師にとっても、天啓のようにひらめくというわけにはいきません。たまたま目の前の子どもとそっくりな状況の子どもに取り組んだ事例に出会い、自分の考えたい支援にぴったり該当する例に出会えた人はラッキーかもしれません。でもそれは、まれなことでしょうし、次の困った場面では、またそっくりな支援例を探すことになります。

であれば、教師ができること、すべきことは、目の前に提示されるいくつかの方法の中から、その子をよく知る教師自身が二人三脚で探し当てていくことのように思えます。では、複数の中から何を優先して選べばいいのでしょうか。それは、子どもも教師もできるだけ楽しんでできそうなことから始めてみるのはいかがでしょうか。

この本では、自分が実践したい状況とできるだけ同じ次元での対処法、いわゆるそのまま使えるノウハウを知りたいというニーズにこだわらず、学校段階や教科を超えて、子どもがワクワクしながら取り組めそうなものを大事に取り上げました。そし

て、こんなやり方があったのか、こんな素材の生かし方があったのかという指導や教材の発想そのものに驚いてもらえるものです。

ですから、指導内容を体系立ててもいけません。子どもにチャレンジしてほしい課題ごとに、一般的な指導法（メインルート）ではない、その子に合ったサブルートを見つけていくプロセスを味わってほしいのです。きっと読者である多くの先生方には、これまでご自身の経験の中でも同様の発想で工夫した体験があったことを思い出してほしい、似たような発想で目の前の支援に役立てられそうなアレンジを考え出しながら読んでいただけるのではないかと思います。どの子のどの場面だったら、こんな工夫ができるかを考え、実践したいと思えること、それこそが子どもと二人三脚で探す楽しさだと思います。

私たちは、今回、この本で、支援を工夫する発想そのものを学びたいと思って企画しました。もちろん、先生方の目の前の子どもたちにすぐ役に立つ支援もたくさんご紹介しています。そこから出発して、もう一工夫も二工夫もできるヒントがたくさん含まれていると自負しています。

読者の皆さんのアレンジで、目の前のお子さんに合わせ「こんな教材をつくった」とか「こんなふうに応用した」という、この本を超えた実践が生まれていくことを期待しています。

2011年11月

編著者 高橋あつ子